終わりに――中学部の実践研究の反省と今後の課題――

本校教育の成否を問われるのは、子どもたちが養護学校を卒業して、社会に巣立った後である。養護学校創立10年の中で、私たちが取り組んできたのは、社会に巣立つという学校教育の出口の問題として、「何を」「どのように」教え育てるかということであった。それが「表現化」であり、「豊かな心」「たくましい行動」であり、「発達と障害に応じた教育」であった。

医学の取り組みは、失敗の許されない人間の生命と常に向い合った仕事だが、障害児を対象とした教育も、後のない防波堤としての仕事だと思うのである。これは、私たちが、若しも安易な考えでこの仕事と取り組めば、時に子どもたちは、生きて働く力が身に着かないばかりか、素裸で荒海に投げ出されたようなものとなるのである。そんな事が万に一つもあってはならないのである。しかし、今年度までの取り組みが、効率的な個の育成に関する問題を解決したかと問われると、心淋しい思いばかりである。例えば、次のような点だけでも、問題は山積みである。

(1) 重度化・多様化の中で、教育内容の精選や編成はこのままでよいのか。

(2) 小・中・高学部の一貫した教育に改善点はないか。

(3) 発達や障害に応ずると言うが、的確におさえられているか。また、問題点の把握は正しいか。

その中で、中学部の個の育成と保護者との連携についてみても、学校で取り組みを、そのまま教師の側より家庭での復習を依頼するという形での傾向が強く、これでは教師主導で保護者依存という従来の連携の域から出ないのである。家庭生活の中に学習事項を構造化するためには、今後更に協力体制を強化していく必要がある。

また、「豊かな心とたくましい行動」との取り組みの中で、5つのタイプに分けて指導法を模索してきた。その中で、5つのタイプにそれぞれの子どもの良さを認めて、問題点の除去改善も、その良さを刺激して取り組むべきだと考え実践してきたが、果して本当にそうかと言われると、確かな結論が出たわけではない。これも今後残された課題であろう。

以上、中学部の実践研究について論述し、提言したが、問題は山積みのまま今後に残されてしまった。私たちの実践が急速に進む対象児の重度化多様化についていくのがやっとという、教師集団の経験の浅さ、未熟さも原因の一つだと思う。しかし、精一杯の努力はしてきたつもりである。今後も子どもから学びとりながら、保護者と連携を強化していき、更に地域社会の中で交流を拡げながら、個の育成（生きて働く力の育成）をめざした実践研究を続けたいと考えているのである。